

## 届けたい思い

妊娠17週でした。突然の出血で入院し、ベッド上での安静の日々にもかかわらず月経のような出血が毎日続いていました。

そして入院生活14日目の早朝、私は小さな赤ちゃんを産みました。泣きもせず、手のひらにのる程小さく、手足が細長い男の子でした。

私の愛の中で育てたかった。強く抱き締めたかった。おっぱいを飲ませたかった。数年が経過した今でも、この思いは時に波のように押しよせます。

退院の前日、看護師さんが「足浴をしましょう。」と言ってくれました。ただ、温かいお湯に足をつけるだけ、ただ、足をさすってくれるだけでした。

でも、彼女は何も言わず、一緒に泣いてくれました。お湯が冷たくなるまで一緒に泣いてくれました。赤ちゃんを亡くしたことは変わらない。赤ちゃんは戻ってこないのに、私はこの時、温かさを感じていました。

退院の日、彼女は私に「つらくなったらいつもおいでね。私はここで待っているから。」と言ってくれました。私はこの言葉をお守りにして日常生活に戻りました。

あれから5年が経ち、現在私は看護学生となりました。自分の看護論とは何か、まだ全く分かりません。ようやくベッドメイキングと、血圧を測れるようになったばかりです。

しかし、自信を持って言えることは「看護とは相手を感じる事、そして表現する事です。患者さんの心を感じて、それを適切に表現する事。表現するとは、私が経験した足浴・清拭・点滴等の技術の他、挨拶・声掛け等多様な方法で表すことが出来ると思います。

私は、足浴というほんの短い看護の時間で忘れられない大切なメッセージをもらいました。それは「看護を通して、人は人を支える事が出来る」「痛みや悲しみを分かってくれる人がいるという事は、大きな支えになる」というメッセージです。今はまだ学生ですが、数年後、一人の看護師となり、このメッセージを目の前患者さんに伝えていきたいです。あの時の看護師さんの様に、今度は私が患者さんの心を温め、時には一緒に泣き、患者さんを支えていきたい気持ちであふれています。

そしていつか必ず、あの看護師さんに会いに行き「看護の道へ導いてくださり、ありがとうございます。」という感謝の思いが伝えられるよう一日一日を大切に生きていきたいと思えます。最後に、私は、あの時抱きしめる事の出来なかった小さな赤ちゃんの、小さな目にもはっきりと見える様、看護の道を大きく歩んで行きます。「いつもあなたを想っています。」

母の思いがあの子に届く様、私は白衣を着ます。